
ポケモンハンターハルの日常

アブソル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンハンターハルの日常

【Nコード】

N2190I

【作者名】

アブソル

【あらすじ】

「ポケモンハンタージュンの冒険」に出てくる女性ハンター、ハルが主人公の短編です。お楽しみください。

(前書き)

ジユン「いや、ハルさんの短編だなんて・・・ビックリしたよ」

作者「まあ前から書こうと思っていたからね」

ジユン「それではお楽しみください!」

清潔なP・H・Cの廊下を一人の女性が歩いていた。

彼女の名はハル。美しきポケモンハンターである。

特に自慢のチャームポイントは自他共に認める髪の毛だった。

繊細で艶やかな髪・・・そしてそれによってより際立つ彼女の美貌は多くの男性を魅了した。

「ハル」

突然後ろから声がした。

ハルが振り向くとそこには白衣を着たかわいらしい外見と氷の瞳を持つ美少女・エリカがいた。

「何でしょう?」

「この書類を今日の午前中までに整理しておいて」

エリカはそう言うとさっさと研究室に消えていった。

私は秘書かなにかと勘違いされているのかしら……………。

ハルはため息をついた。

ハルが不満に思っていると突然後ろから声をかけられた。

「おっ、どないしたん。そんな顔しとるとせつかくの美人がだいなしやで〜」

ベタベタの関西弁で気軽に喋りかけてくる色黒な青年・アキラは何がうれしいのかニコニコと笑っている。

しかし彼はたいていの場合笑っているのでハルは気にはしなかった。

「エリカ様に雑用を押し付けられたのよ」

「あいつ研究以外のことになる誰かに押し付けまくるからなあ」

P・H・C幹部のことをあいつ呼ばわりするところが大物である。

まあ彼はNO・1のハンターであるから半幹部みたいなものであるが……。

ちなみにエリカが研究してる内容はハルは知らないので話題が自然に流れる。

「まあちよつとだけ手伝ったてもええで。後で自分の部屋に持っていくわ」

アキラはハルの手から書類を三分の一ほど取ると鼻歌を歌いながら去っていった。

彼……なんでハンターなんかやってるのかしら。

ハルがそう思って自分の部屋に向かって歩いていると向こうから一人の少年が歩いてくる。

色白なその少年はハルを見るとお辞儀をしそのまま通り過ぎようとする。

「ねえジュン君」

ハルが呼び止めるとジュンが振り向く。

「何ですか？NO.3」

「あのね・・・組織の中ではハルと呼んで頂戴」

「ハルさん・・・僕に何か御用ですか？」

ハルはニッコリと笑うとジュンの手に残った書類を押し付ける。

「それやっといてね」

「え・・・なんで僕が」

「お願い」

ハルは知っていた。彼が女性に対してあまり耐性が無く、女性の特権攻撃（甘える感じで押し付ける等）に弱いということ。

ジュンの師匠であるポケモンハンターJはそういう女性的な振る舞いからかけ離れており、四年間一緒にいた女性はほぼ彼女だけであった（ポケモンを除く）ことも一つの理由だろうとハルは考えている。

ハルは呆然と押し付けられた書類を見るジュンを後に自分の部屋に向かつて行った。

ハルが部屋に入るとそこには不思議の世界が広がっていた。

壁は虫ポケモンのブロマイドで埋め尽くされ、机には精巧なポケモンの人形が（もちろん虫タイプ）並んでいた。

彼女がハンターをやっている理由・・・それは組織から定期的に支給される（といっても受け取らないハンターも大勢いる）ポケモンの中に時々存在する虫ポケモンをもらうことだった。

自分でゲットすればいいじゃないかと人は言うかもしれない。しかしそこには深い理由があるのだ。

というのもハルは虫系ポケモンが好きすぎて見とれてしまいゲットすることが（というかバトルすることが）出来ないのである（汗）

このため組織内では虫系ポケモン捕獲の依頼はハルに回らないようになっていた。

ハルがイトマル型のソファでくつろぎ、虫ポケモン写真集&特集を読みつつヘラクロスを模したマグカップを片手にマユルド饅頭を食べていると電話がなった。

・・・今さらだと思うが携帯電話にも虫ポケモンのシールが貼つてある。もちろん待ち受け画面も虫ポケモンだ（汗）

「もしもし」

「やつほゝ俺だよ、俺！」

軽薄な声には聞き覚えがある。

「……シン君、何か用？」

「もうちょっとさあ、明るく返事してくれよ……あつ兄ちゃん、今は俺が話してるんだから……貸せて……横暴だあ！あ……そこは駄目……もしもし、うちの馬鹿弟が失礼しました」

先ほどの軽いノリとは打って変わり真面目そうな声に変わった。どうやらシンは電話を取り上げられたようだ。

「いいのよ……コウ君」

ポケモンハンターコウ&シン。彼らは二人で一組のハンターで、コードネームNO.2を二人で共有してる珍しい事例だ。

NO.1からNO.4までのハンター達は「四天王」と呼ばれ（といっても実際は五人だが）尊敬されている。

「ハルさん……お電話を差し上げたのは他でもないです……ついにあの大会がこの地方で開かれるとの独占情報が入りまして……まあ、一カ月後ですが」

「本当！」

いつも冷静なハルが興奮する。

ある大会……それは虫ポケモン捕獲ゲームである。

そこで支給されるボール。インセクト・ボールは虫ポケモンなら絶対に捕獲できるというアイテムで、それを使って制限時間内に捕まえた数を競う、というものだ

・・・がハルにとっては数を競うことなどどうでも良かった。彼女の狙いは投げるだけで虫ポケモンを捕獲できるインセクト・ボールであった。

重ねて言うがハルは大の虫ポケモン好きである。だからこそ出会っても愛おしい姿のあまり攻撃できずにそのままゲットのチャンスを逃してしまふ・・・というのが常だった。

「でも・・・このボールがあれば・・・自分の手でゲットできるかもしれない」

組織から虫ポケモンを支給されるのを待つのに飽き飽きしていたハルは、気分転換も兼ねて大会に出ようと考えていたのだ。

「わざわざ有難う、コウ君」

ハルの美しい声に電話の向こうでヨウが火照る。

「いや・・・僕は当然のことしたまで・・・ちょ・・・シン！邪魔するなって・・・ああ。なあハル姉ちゃんその大会俺らも参加していいいよな?!」

再び電話の主導権を握ったシンが喋る。

「ええ、わざわざ探してくれたお礼に当日なにか食べるものでも奢

るわ」

「やった〜！ハルさんと一緒にランチなんて光荣・・・あ、おまえポケモンを使うのは駄目だろ・・・ちょ・・・ぎゃああああ・・・ガチャン！ツー ツー ツー・・・」

・・・忙しい二人組みね。

ハルは受話器を見ながら苦笑していると、コンコンコンとノック音がした。

「どうぞ」

「ハルさん・・・書類出来ましたよ」

ジュンが机の上に書類をそつと置く。

「ご苦労様。これお礼」

ハルは小物箱からアゲハントのキーホルダーを取り出し、ジュンに手渡す。

「はあ・・・有難うございます」

「アゲハントには自由と探求の意味があるのよ」

と言ってハルはニッコリ笑った。

ジュンが出て行ってからしばらくするとアキラが入ってきた。

「自分の部屋はいつ見ても虫ポケモンのグッズだらげやな」

アキラはニヤニヤ笑いながら書類をハルに手渡す。

「有難うね。それじゃお礼に……」

ハルは先ほどの小箱からドクケイルのキーホルダーを出す。

「おっ可愛いやん。サンキューな」

アキラは腰のボールホルダーにキーホルダーをかけると意気揚々と部屋から出て行った。

ハルは部屋から出てエリカの研究室を目指す。

研究室はP・H・Cビルの三階にある、大きな部屋でエリカ専用である。

研究室に近づくと薬品のおいがする。

学校の理科室を思い出すわ……。

「エリカ様」

ハルが部屋に入ると窓辺でエリカが実験している最中だった。

といつてもカメラ研究は地下室で秘密裏に行われており、ここでの主な研究は他の職員に見られてもいいようにポケモン治療薬の開発である。

ところどころ薬品のあとがついている白衣を着て、手に試験管を持つ姿はある意味スタイルが決まっているとハルが思っている。エリカが試験管を持ったままハルに近づいてきた。

「出来たの？早いわね」

エリカは感謝の一言も言わずに書類を受け取るとそのまま実験を続行し始める。

まあ・・・そんな感じで毎日が過ぎていった。

そして一カ月後・・・。

「ついにこの時が来たわね」

いつに無く興奮するハル。手には受付でもらったインセクトボールがある。

「ハル姉ちゃん！今日はガンバロー！」

横でハイテンション気味の少年が言った。

茶色がかった髪に軽いノリの少年・シンは横にいた彼そっくりの少年・コウに話しかける。

「なあ、やっぱりここにいるポケモン全部奪うのか？」

「馬鹿。そんなことしたら大会に来た意味無いだろ！」

「あっそっか俺忘れてたよ」

「こんな馬鹿な奴が僕の弟・・・恥ずかしくて涙がでそうだぜ」

「兄ちゃん！馬鹿って連呼するなよ！」

「だって馬鹿だろ。まあ、僕は優等生だけど。お前とは違って」

「く・・・でも俺のほうがポケモンバトルは強いんだぞ！」

「な・・・シン、勘違いしてるようだな。僕はいつも手加減してるんだ！」

言い争う二人を無視しハルは森の中に入っていく。

「なんか・・・今すぐにも出てきそう」

「あつハル姉ちゃん！あれ！」

赤いボディに二つの大きなハサミ。そして凜々しい顔・・・。

ああ！なんて美しくもスタイリッシュなのかしら！

ハルは見とれるを通り越して感動していた。

「ハッサムね！この大会の目玉じゃない！」

ハルはハッサム目掛けてインセクトボールを投げた。

しかし・・・。

「メタグロス！雷パンチ！」

バキツと音がしてインセクトボールは破壊されてしまった。

「おいおい・・・俺がそのハッサムをゲットするんだぜ？メタグロス、目覚めるパワー炎！」

メタグロスの放った炎はハッサムに直撃する。

四倍のダメージの炎技を喰らってハッサムは倒れてしまった。

ジュンと同じぐらいの少年が生意気そうな表情で森から出てきた。どうやら彼もハッサムを狙っているらしい。・・・というか倒してしまった。

「あなた・・・何者？」

「俺はリーフ。まあ、ポケモンコレクターとでも言っておく。アンタには関係ねえがな」

「リーフ・・・ですって!？」

ハルとコウ&シンが顔を見合わせる。

ポケモンコレクターリーフ。詳しい説明は省くが要するに珍しいポケモンを収集する闇のバイヤーである。

取引するときも自ら現地に赴くものの姿を見せることがあまり無いため、ハンター達の間でも有名だが直接会った者はいない。・・・いやこの言い方は語弊がある。たった一人・・・ジュンだけはリー

フと面識がある。

とにかく半ば伝説と化した人物なのである。

まさか・・・こんな少年だったなんて。

ハルは気を取り直して応える。

「いいえ関係ならあるわ。私たちポケモンハンターですもの。コードネームはNO.3よ」

そういつてハル達はP・H・C公認ハンターの証である逆三角形のピンバッジを見せる。

今度はリーフが驚く番だった。

「なんだって！ふうん珍しいこともあるもんだな」

リーフはしばらく考え込んでいたが、やがてニヤツと笑った。

「そこに倒れてるハッサムは譲るからよ、これからアンタと取引するとき安くしてくれ」

さすが長年ハンターと取引してきたバイヤー。抜け目が無い。

「分かったわ。じゃそのポケモンは私が捕まえてもいいのね？」

ハルは二個目のインセクトボールを投げる。

ハッサムは難なくボールに治まる。

「やった。前からハッサムは手に入れたかったのよね」

「よかったですね！あっそう言えば今日はハルさんの誕生日でしたよね？」

コウの言葉にハルは思い出した。

そうよ。そうだったわ。なんで忘れていたのかしら？まあ、ここのところ忙しかったし（リュウマとの対戦など）……。

「姉ちゃん！この近くにケーキ屋があったからそれで祝おうぜ！」

シンは便乗するつもりだ。

「アンタたちハンターっぽくないな……」

リーフは苦笑すると去っていった。

「ここは決め台詞を言ったほうがいいのよね？……ハッサムゲツトよ！でいいの？」

「ハル姉ちゃん……グダってるよ」

「僕もそう思う」

ハル達は顔を見合わせて笑った。

幸せそうな笑い声はいつまでも森の中に響いていたという……

(後書き)

ハル「ハツサム・・・あぁなんて美しいのかしら」

ジュン「というかさ・・・なんかほのぼのしすぎじゃない？」

作者「いいの。ハンターも人間だっことを書きたかったただけだから」

ジュン「そういえば・・・コウ&シンは本編でもでてくるの？」

作者「もちろん。いつになるかは分からないけど」

ハル「新しく加わったハツサムと共にもっと活躍するわよ」

ジュン「頑張ってください！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2190i/>

ポケモンハンターハルの日常

2010年10月9日05時14分発行